

スリットドラム

どこかで聞いた音だ
目を閉じて体で受け止めていく
どこだったのだろう
ゆらりと揺れる

遠いけれど最も近くに
その音はある
時が逆流して
形のない混沌の中に
すうつと巻き込まれる

根源に至る音
出会いは私の中に
出会いはあなたの中に
：

ああこれは
胎内で聞いた音

目を開けると
木造りの箱型の打楽器が
奏者の思いのままに打たれ
心地よい響きで
部屋を揺らしていた

音から始まった詩の朗読会。さほど広くない空間の中で、言葉が音に乗る。打楽器と共に、尺八やバイオリンなどが入り言葉に翼をもたらすようになった。部屋の中に花が咲いていく。さすが林嗣夫さんの『花ものがたり』。アサガオや冥加の花：私の中にもそれぞれに物語があり、共鳴していく。朗読会が終わり、あいさつの中で林さんは、人の観念にある花の姿をもっと自由にしたかったというようなことを語っていた。言葉の可能性を追求し続けている人の言葉は、自分の中にある細隙に風を起こす。

花は美しい。その花を描いた絵も美しい。

最近では日本画家の堀文子さんの絵に惹かれた。テレビの美術番組のことだ。

—あでやかな花の中に男と女がいるのよね。

男が女を囲んでわいわいわいわい：

花は生き物だから心を打つわ。

おしべがめしべの周りに密集している姿を見つめて描きながら、彼女は語っていた。

軽井沢のアトリエで冬枯れの草木を見つめて描いた「冬野の詩」

—名も知らぬ枯れ草の絡みの美しさ：

そこにこの草の命の痕跡があるのよ。

愛惜しそうに語る八十九歳になる画家の見る花には、林さんの思いに重なるものがあるように思う。

そこにしか咲かない孤絶の花ブルーポピーを描くため八十二歳でヒマラヤに登り、出会いを求めた画家としての希求の深さは、詩人がもつと自由にと言葉を求めるエネルギーと通じるだろう。

その彼女が今、微細な生物の世界にのめりこんでいるという。

理学博士の中村桂子さんが、童話作家の山崎陽子さんと共に書いた『いのち愛づる姫—ものみな一つの細胞から—』の本の装丁や絵は彼女のもので、バクテリアやボルボックス、ミドリムシなどが生き生きと描かれている。

—生きている限り驚きたいわ。

ミクロの世界にひれ伏すような思いで描いているのよ。

ミジンコは生命が透き通っていて美しい。

生き物の仕事が見えるの。

もう、私に命の終わりが近づいているから見えるものなのでしょうね。

微笑む堀文子さんは美しかった。

それにしてもあの打楽器は何というのだろう。

『花ものがたり』を聞きながら、いのちの源に至る細胞にまで想像が流れていったのは、あの音にある何かがあったように思う。

アフリカや東南アジアの民族楽器がকাশ出すような音だったのだけれど、すつきりとした木造りの箱は野性味はなく洗練されていて民族楽器のイメージではない。

演奏していた方に聞くと、

「あの楽器はドイツで作られたのですよ。スリットドラムといいます。日本にある木魚と種類はいっしょです。スリットというのはスカートなどにある切れ目と同じ意味です。」と、教えてくれた。

なるほど。確かに木魚にもスリットがある。

よく見ると、その箱のスリットは不思議な模様になっていて、まるでナスカの地上絵のようなものだった。

私でも打つことはできるというので、打たせてもらった。やわらかい撥で打つと箱の中で共鳴し、朗読会が始まったとき引き込まれた感じそのままに音が出て、また不思議な感覚になってきた。

共鳴は

風を生み

風はスリットをすり抜けて

音を生む

言葉が

人の思いのスリットで

響くように

出会いは私の中に

出会いはあなたの中に

:

アムウの死から

三年前の冬のことだった。一人暮らしの伯母が共に暮らしていたヨークシアテリア犬のアムウが死んだ。

一月の寒い朝、伯母の足元にうずくまっていたアムウは伯母が朝の支度をしている間、その姿を見ていたという。そして声をかけるとそのまま息を引き取った。静かな死だった。

アムウは、伯母にとってにはペットという言い方では語れない生活の伴侶になっていた。伯母が八十八歳という年齢を乗り切る時間に欠かすことにできない存在だった。散歩すること、食事すること、身綺麗にすること、病気になるないように管理すること。アムウに心を砕き、話しかけ、答えるような眼差しに自分を映しながら、伯母は支えられたことだろう。けれどアムウも十三歳、もう年寄りだったのだ。

息を引き取ったアムウをショールにくるんで伯母が胸に抱き、ちようど訪れていた私と二人で冷たくなるアムウに別れを告げた。

子犬のアムウはやんちゃ娘だった。かけまわり落ち着きがないからよく叱られてい

た。それでもその姿は七十代後半から八十年代になった伯母を力づけ、散歩に引っ張っていき、伯母の暮らしを彩った。

私の子ども達もアムウと遊んだ。伯母とは生活が離れて遠くに暮らしたときも、子どもの誕生日や参観日、学校行事のたびに伯母はアムウをボックスに入れて汽車に乗り、私たちの元に来てくれた。子ども達の成長を喜び、その日を共に過ごした。

楽しかったいくつもの日々が思い出されて、アムウの亡骸をなでる手に去りゆくものの悲しさがあふれてくるようだった。

アムウが死んだ冬の日、私は予想していたのだと思う。アムウの死がもたらすものが何かということ。

伯母はアムウが死んでからは犬を飼わなかった。八十八歳ではいつ逝くことになるかわからない。責任が持てないと思ったようだ。けれど、その頃から伯母の暮らしは変わってきた。

ずっと一人で仕事をし、自分の暮らしを成り立たせ、胸を張ってきた伯母は、少しずつ閉じ始めた。

いつも新聞を隅々まで読み、テレビで見たことを自分の考えも交えて話していたのにしなくなった。兄弟や姉妹、姪や甥の誕生日は忘れずに電話していたのにしなくなった。好きだった料理は、火が危ないからと止めて、毎日の食事は配達されるお弁当に頼った。素晴らしかった編み物も習字もちぎり絵も全くなりなくなった。

そして三年目のこの夏、異常な猛暑の中で伯母は弱っていった。目に見えて痩せ、食べられない様子は尋ねるたび私を不安にさせた。

それでも伯母は「大丈夫」と言い続けた。

一人で生き続けた歴史が染み透っているのだもの、できないはずはないと思っていたのかもしれない。

まわりの私たちははらはらしながら、けれど伯母が決めることだと、ただ見るしかなかった。

九月の終わりの日、とうとう事件は起こった。

風呂に入っていて立てなくなったのだ。

ちょうど月末で大家さんの集金日だったことが幸いして伯母の異変に気付いた大家さんや近所の方々に助けられ、伯母は命は取り留めた。しかも家の前の畑に休日の楽しみで畑仕事に来ていた近所の内科医の先生がいて、騒ぎを聞きつけてすぐ診察してくださったことも幸いした。

話を聞くと、どうも風呂で動けなくなったと同時に眠ってしまったらしい。気がついていたら朝だったというので、もしこれが寒い日だったらと思うとぞっとする。それでも湯を入れるときにバスタブに満タンではなく半分くらいにして入る習性や、まだ秋は遠い夏のような夜だったということや、様々な幸運があつて命は奪われずにすんだ。けれどその後、伯母は籠がはずれたように、生活の自立性をなくしていった。

体が思うように動かないということと奪われる自由は多い。起き上がるのがまま

ならないので生活を成り立たせること全てに介助が要る。着替えること、排泄、食事、風呂……。伯母の今までを思うと、苦しさはどれほどだろうと思われた。

それでも九十一歳のこの状態を受け入れるしかない、何度も眩きながらはじめての一週間は伯母は越えた。

こういう大変なときでも伯母の幸運は続いた。生活の介助をしてくださる方が見つけられ、洗濯や掃除、着替えや食事の見守りをしてくださった。近所の方も様子を見て声をかけてくれた。

伯母は子どもがいなかったので姪たちをかわいがってくれたが、東京にいる姪の一人がかけつけて来て、私を助けてくれた。

私たちはこのままでは生活はできないと判断し、伯母の介護認定の請求をすると共にその先を考えて手分けして行動した。手続きはめんどうで手配するのはかなりの困難があった。けれど二人で行動したことはその後の道を開いた。伯母を巡る親類の者たちももう高齢で実際に来ることはできない。でも連絡しあって今できる最善のことをと考えあった。

そうして一ヶ月半。伯母を受け入れてくれる施設が見つかり、伯母は入所した。

一人で此処でやりきりたい……それは伯母の願いだった。けれどお風呂事件はその思いとは裏腹に九十一歳の現実を認識させ、生き方の区切りをつかせ、最期まで生ききるための選択としての入所を決意させたようだ。

そしてこれはこの事件からというよりも、アムウの死からではなかったかと、私は

思う。

伯母の部屋の壁掛けには牧水の歌がある。

―かたはらに 秋くさの花 かたるらく
ほろびしものは なつかしきかな

静かな歌のそばで、アムウが見ているような気がする。